

海底地獄からの生還

新潟県 小川 利行

(旧姓 米持)

私は昭和二(一九二七)年一月二十日、新潟県東頸城郡奴奈川村大字室野(現在の同県十日町市室野)で、今でこそJR北々線が通り開発されましたが(松代駅)、当時は陸の孤島と言われた豪雪地帯の山の中で、男六人兄弟の末っ子として生を受けました。

父はこの山村地域では有名な建築業者でしたが、五十二歳の若さで心臓病で病死し私は父の顔を知りません。建築業は解散しましたが母が田舎育ちで農業の重要さを父に話して、長男は農家出身の嫁をもらって農業に従事しており、私も父親替りで育ちました。

他の兄四人共、皆陸軍に属し、中支や満州、朝鮮の部隊や習志野高射砲隊に配属されており、海

軍は私一人です。終戦時幾百万と言う戦死者のあった中で、当家では一人の戦死者もなく皆無事復員、神仏のご加護を深く感謝しています。

昭和十二年、支那事変が勃発し、次兄が倉林部隊で中支戦線へ出征し、軍国少年ではありませんが世の中がその方向へと進んで行く時代です。また海兵第七十一期生徒の米持文夫が休暇で帰郷され、その凛々しい姿が胸に焼き付きました(飛行隊にて戦死さる)。満蒙開拓か軍隊志願の時代となり、私は迷うことなく海軍志願を決意したのです。

私は昭和十六年三月、高等小学校を卒業して、昭和十六年十月、第一次試験に合格、さらに第二次試験を舞鶴海軍航空隊での受験へと進みましたが、適性検査で不合格となり、昭和十七年五月一日、水中測的兵(聴音兵)として舞鶴海兵団に入団せよとの通知を受けました。

舞鶴海兵団に入団、新兵教育が始まりました。新潟県の山中育ちの私にはすべて新しい体験です。健康で多少体力にも自信がりましたが、毎日の

訓練は苦しみの連続でした。ハンモックの上げ下ろし、短艇漕ぎ、陸戦訓練、手旗信号など海軍兵の基本を叩き込まれました。皆泣いたであろう短艇漕ぎでは、力が入り尻の皮がむけ薄血が出る。痛み押えに便所でこっそりと歯磨粉を尻につけたことが今も思い出されて来ます。

当時は、日米海戦の火蓋が切られた直後の最も気合の入られた志願兵でした。この期の水中測的兵は少年水測一期生ともいわれ若年兵の一団八十人です。厳しい訓練と学科の中で特殊な音感教育が実施されたことです。水中測的（聴音）兵は水中音波を発信して、海中深く潜没する敵潜水艦の探知、水上艦船のすべてのスクリーン音波を捕まえて、艦種・方向・速力等を探知する重要訓練でした。

少年兵といわれる兵種に通信兵があり、十五、六歳の若年兵からあのモールの世界を叩き込むのです。通信も聴音も若い感覚が強調されていたのです。新兵教育中に特殊音感教育訓練を受けま

したひと駒でした。

昭和十七年七月三十一日、新兵教育卒業。音楽講堂に入りピアノの和音から聞き分けます。チェイグレイ・チエツアー・ハーデーゲー・の三音を覚え、これを記号で回答用紙に記して行く、これが百点満点まで続くのです。

次には艦船音の習得です。ピストン、ジエゼル、タービン、モーター（潜水艦）音の識別に移り、それぞれの音源特長を徹底的に叩き込まれました。録音板が回ります「練習一番、用意！」の号令あり、無念無想、心を沈めて放送される音源を即座に、これを記号に書留めて行くのです。

昭和十七年八月一日、横須賀海軍機雷学校普通科練習生入校。通常、新兵教育を受けると直ちに実施部隊配属となるのですが、私達水測兵は更なる専門教育を受けるため、機雷学校入校となりました。

三浦半島久里浜の先端、東京湾を望む新校舎で八カ月わたる水中測的兵として練習生教育を受

け、心身共に充実した教育期間を過したのです。第六期水測四百人、各分隊百人中私が首席卒業生として、昭和十八年三月三十一日、学術奨励賞を授与され卒業しました。

昭和十八年四月一日、舞鶴海軍防備隊勤務を命ぜられました。海軍志願して約一カ年、心身共に鍛えられ立派な水兵になりました。そして防備隊に配属され実施部隊の一員となったのです。そして舞鶴灣の喉口に当る博奕衛所で二十四時間体制の聴音所勤務に就きました。

舞鶴軍港に出入する全艦船をここの水中聴音機がキャッチしているのです。万一この中に敵潜水艦音が入ったら大変なことで、直ちに二重三重の警戒体制がなされました。湾口一番狭い所に百メートルの間を取った二列の聴音機雷が布設してあり、外側は右耳に内側は左耳に掛けてあり、音源がこの中央にかかった時が、右耳から左耳に抜ける頭の中心でゴソと聞えます。この時ボタン一つ押せば、何十個の海底聴音機雷が大爆発を起し、

敵潜水艦は木端微塵となるように設備されていた。

同年兵同志の学校生活と異なり、階級の厳しい実施部隊の明け暮れ、日常作業態度が悪いと先輩による夜の罰直が待っています。覚悟はしていたものの殴られる尻の痛みはまた格別でした。衛所勤務も馴れたところに連合艦隊司令長官山本五十六大将戦死の悲しい知らせがありました。

昭和十八年六月一日、海軍潜水学校入校（呉分校）を命ぜられました。防備隊に着任して二カ月で何と潜水学校入校を命ぜられました。何たる運命のいたずらでしようか、かつて海軍飛行兵を命じた者が、今度は百八十度違う潜水艦乗りになれとは、命令とあれば致し方ありません。戦局のただならぬものを感じずにいられず、潜水学校行も自分の天命と考え全力を尽す決意で校門をくぐりました。

よく先輩から「潜水学校は殺される目に会う所」とその厳しさを冗談話しでおどかされましたが、

正に入校第一日目から難問に会ったのです。入校してくる者を二十人ぐらいをくくりにして当直教員の説明があります。「一種軍装を事業服に着換え、衣囊に入れ、衣囊を棚に納める。テールに並べてあるハンモックをビームにかけ、ほどいて内部を点検、再度くくり直して元に戻す。以上三分以内に終った者から中央通路に整列。かれ！」ピーの号笛一声あり、必死に旅装を解き事業服に、衣囊を棚に納めてハンモックの調整にかかる。中々網がもつれたりして気が焦れど思うように進まない。夢中で最後の網をくくりつけて終了、パツと中央通路に飛び出す、トップ整列。

瞬間を置いて次の者は何と舞防から共に入校した山形出身同年兵の梅津雄三君ではないか、「はい、これまで！」と時計を手にしている当直教員の声がある。以下の者は全員時間切れで後に厳しい罰直が待っています。自分のハンモックを担いで駆足、校庭一周です。青息吐息で戻るとさらにそこには鉄拳制裁の二、三発が待っていました。

そして最後には教員の訓示が「いいか！潜水学校は出来ないことをせよとの難題は言わぬ。現に二人の合格者がいる。今後覚悟して校風に従うよう努力せよ」と話があり、以来四カ月間、一刻も気の緩むことのない潜水学校の様々な教育・訓練実習に心血を注ぎ、「潜水艦乗組魂」を鍛え上げられていったのです。

昭和十八年九月三十日、晴れの卒業式は大竹潜水学校にて行われ水雷科、水測科、機関科、電気科の五百余人が勢揃いしました。呉分校から参加の水測分隊百人中最下級兵の私が主席卒業生に選ばれ、式典では校長より「海軍大臣賞」と刻まれた記念の時計を授与されました。私の一生の宝物となっております。

卒業後は直ちに神戸三菱造船所で建設中の戦闘潜水艦呂号第四十三潜水艦水中聴音兵として十月一日着任しました。

呂号第四十三潜水艦の戦歴・行動

昭和十八年十二月十六日

艦船本部より引き受け瀬戸内海で猛訓練が続く。

初代艦長海軍少佐西松張男

昭和十九年三月十一日

第一回出撃、呉港より。

トラック島方面南方海域へ進出警戒配備中、

同年三月二十八日

潜航中負浮力タンク排水弁爆発艦内浸水潜航

不能にてトラック立寄り応急修理し、四月九日

母港舞鶴港に帰投し修理に入る。

同年年六月四日

第二回出撃、舞鶴港より。二代艦長海軍大尉月

形正気

サイパン島めざして航海、六月十一日未明サイ

パン島に到着す。午前中半舷上陸許可ありガラパ

ン市に上陸す。午後一時米軍機動部隊の来襲あり。

以降サイパン島玉砕戦争へと続く。

同日「あ号作戦」による指定海域へ急行、配備

につく。六月十七日夜十一時過ぎ、敵駆逐艦の電

探補足による艦砲射撃を受け急遽潜航、一晚中爆

雷攻撃にさらされ被害多く戦闘不能に。「海底地獄からの生還」記事を別途記録し後世に残す。

六月二十六日、戦闘不能状態で舞鶴港に帰投す。

海底地獄からの生還

―爆雷攻撃と地獄の艦内―

サイパン島玉砕戦当時、洋上警戒航行中の「呂

号第四十三潜水艦」は、夜の十一時すぎ真暗闇の

中、敵駆逐艦の電探に捕捉され突如、艦砲射撃を

受けたのです。

幸い二百メートル前方に炸裂し、途端に「急速

潜航」の命令、けたたましい警急電鐘が艦内に響

き渡ります。いち早く全員部署の配置につき、十

秒そこそこで艦は洋上より姿を消し海中へと、

「深さ百！」の命令に艦は海中深くへと潜航して

行きます。

「敵駆逐艦 右五〇度 近づきます」全速力で

敵艦が刻々と近づいてくる様子が水中聴音機によ

り手に取る様に聞こえて来ます。迫まり来る敵艦

の動向を刻々艦長へ報告しております。艦は「自

動懸吊装置」により一切の動きを止め、海中百メートルに停止し、八十人の乗員は息を殺し、額に大粒な汗をにじませながら爆雷防御に構えておりました。

「グワーン！」「グワーン！」「ビリビリ！」と凄まじい爆発音、ぐらぐらと艦は大地震を食らったように揺れ、正に鉄板が切り裂かれるかと思うような衝撃が走り五、六発の爆雷攻撃を受けます。

「距離八百」と司令塔より全艦に伝達あり、時を経ずして本艦頭上を敵艦が横切って行く。誰の耳にも「グワーン」と悪魔の響きが聞こえて来ます。今こゝで一発爆雷を食らえば艦は木端微塵だ、きりきりと身の引き締まるを感じ、脂汗がにじむ思いの数秒間、両手を合わせてただ神仏にご加護を祈るのみでした。

頭上を通過した敵艦は洋上で円陣を画いて走りながら反転して、また本艦に迫ってきます。「敵艦近づきます！」これ以上耳が痛くてレシーバーを付けていられず電源を切ってしまう。

その瞬間「ガガガン、ビリビリ！」と強烈なる右からの爆雷音とその衝撃たるや何とも言葉で表現は出来ない。かつて近所の大杉が落雷によって裂かれた衝撃を味わっているがそんな比ではない、やはり五、六発の炸裂だ。

一瞬にして艦内電灯が消えて真暗闇に。深海百メートルは正に海底地獄となります。

艦は後部の気蓄器がやられたか、ツリム（前後の釣合い）が崩れ、艦尾から沈み始める。二度と浮上は出来ぬ、死だ、死が迫ってくる。必至の手探りで非常灯スイッチをひねる。電池の光がポーンと辺りを照らす。乗組員の顔が幽鬼の様に浮かび上がってくる。

幸い艦内には浸水の様子はなく、「助かった！」と我に返った。爆雷衝撃で艦内塗料がはげ粉々となつて飛散し霧がかゝった様である。頑丈な海軍時計もガラス板は割れ、針は吹っ飛んでいる。覚悟の上とは申せ爆雷の恐ろしさは此の世のものではない「地獄だ！」。しかし負けてはいられない。

艦内電灯も復旧した。沈勇を鼓舞して後部食糧倉から十キロ白米麻袋を各区手渡しで前部発射管へ移動させ、ようやくツリムの安定を図ったため艦尾からの沈むのを防止することが出来た。正に食うか食われるかの戦いである。

しかし敵艦はまたまた反転して執拗に襲いかかってくる。三度目の爆雷は、いよいよ本艦頭上での炸裂か！「もう駄目ださらばこの世を」と思わず合掌したのも束の間、十七歳の若き生涯が今終わるかと感じる。ふと脳裏を横切るのは故郷の生家や母の顔、兄達の面影であった。頭上を今敵艦が全速力で「グワーツ！」と言う音をたてて通過して行く。

死を覚悟した我々に再びあの熾烈なる爆雷攻撃、耳が裂けるか、頭を鉄槌で打たれたか、船体が粉々に裂かれたかと思わせる激震、失神したかの様な数秒が過ぎて、ふと我に返る。

「助かった！」敵艦は本艦頭上を越えて左へ投下となったのだ。正に天祐神助の賜である。以後

は左へ左へと遠ざかって行ったのです。爆雷攻撃と海底地獄、艦内は修羅場の様子でした。

酸素欠乏の苦しみを耐えて

「水漬く屍」は覚悟の身でありながら、死すことより生き抜く事の重要さを深く体験しました。夜を徹して敵駆逐艦に攻められ、その夜が明けたとなってもまだ危険で浮上出来ません。

サイパン島近海の制海権、制空権はアメリカ軍に押さえられていたからです。大事な水中聴音機も爆雷攻撃で受けた衝撃による故障も、必死の調査点検と修理で以前に増しての高感度となり、全方向の精密聴音を続けるのですが音源はなしです。しかし飛行機がどこからくるや分かりません、そのまま潜航を続け夜の到来を海中で待つより外はないのです。

いよいよ艦内の空気の濁りもひどく、酸素量も少なくなつて来ました。艦内温度や気圧も上昇して虫の息そのものなのです。艦長も水兵長も同じ苦しみの中におり、空気のうちまき有り難さは潜水

艦乗りでなければ分かりません。

「一蓮托生」生きるためにはこの苦難を乗り越えて行かねばなりません。潜航以来二十時間が経っており、苦しさも極限に迫って来ました。

「殺してくれ！」との兵の苦しい叫び声が聞こえて来ます。

必死の忍耐でようやく新鮮な空気を胸いっぱい吸うことが出来ました。潜水艦内の酸欠地獄からの生還であります。かくして「死ぬ事より生き抜く」ための極限を身をもって体験致しました。

昭和十九年九月十七日、第三回出撃、舞鶴港より。

舞鶴港にてあのすざましい爆雷攻撃損傷個所の修理に加え全艦に電探防止用塗装を施し、パラオ島東南海域へと進出、途中命令変更あり米軍豪州より比島上陸か？の情報にその進路偵察任務が比島南端ハルマヘラ海域へと索敵行動を続ける。任務を終了し帰途台湾、沖縄の中間海域で大型台風に遭遇、体力の消耗あるも、無事十月十四日呉港に

入港す。

昭和十九年十月十九日、第四回出撃、呉港より。

敵艦との遭遇なく平穏な戦場かと思えば、その帰り大台風に遭い、くたくたで帰投すれば何と緊急事態の発生！米軍レイテ島上陸。僅か五日間で応急修理、物資を補給し、緊急出撃しました。

「南無八幡大菩薩」の吹き流しを潜望鏡になびかせての出撃です。捷一号作戦の指定海域、サンベルナルジノ海峡東口哨戒域へ進出、レイテ沖海戦は連合艦隊の決戦場であり多くの空母艦船の撃沈を見ております。やがて任務を終り同海域を離れ、十一月十六日珍しく佐世保へ入港し、応急修理、物資補給、兵員休養を行う。

昭和十九年十二月八日、第五回出撃、佐世保より。

英気を養った兵士は勇躍し、ルソン島東方海域に配置されました。中旬ごろ、水中聴音により一万メートルかなたの敵大輸送船団を発見して「魚雷戦用意！」までかかるも船団の真ただ中に入

り中止、船団通過後これを艦隊本部に報告す。(マニラ奪還の敵船団なり)この時の電波が敵側に補足され、本艦を撃沈せよの敵方電波を日本側に傍受され、直ちに呂四十三潜退避せよの命あり電波戦の恐ろしさをしみじみ味わい命拾いした一幕でした。

昭和二十年一月七日、ルソン島東方海域任務を終了す。久し振りに母港舞鶴港へ帰投となりました。この年は北陸地方はまれに見る大雪で列車運休が相次いでおります。兵員の帰参休暇が出されても京都府、滋賀、福井、石川県辺りまで何とか列車が出るものの富山、新潟、山形の兵士達はそろって大雪の中石川県山中温泉まで三泊四日の兵員休養をさせて頂きました。

一月二十二日夜、私にとって運命の日となり舞鶴海軍工廠内にて熱湯により右足に大火傷を負ってしまい、舞鶴潜水艦基地隊の病院に収容され退艦となりました。

三週間の後出撃する呂四十三潜水艦の勇姿を病

院の窓辺から涙ながらに見送りました。何の因果でこんな目にかと泣きもしました。しかしこれが今世この世の別れになりましたよとは、その時は何も分かりません。

昭和二十年二月十三日、第六回出撃、舞鶴より。

舞鶴より出て呉港に寄港し十六日、呉発硫黄島東南海域へと進出、二月二十一日米駆逐艦レンシーに遭遇、初の魚雷戦で撃沈の大戦果を収めました。金鵝勲章ものよと艦内涌き立ったと思えます。好事魔多しのたえがあります、その六日後、二月二十七日米空母アンチオより発進の哨戒機により硫黄島北西方面海域で呂号四十三潜水艦は撃沈させられ全員戦死す。

以上の二件は戦後日米合同調査で判明した事項なのです。海軍規定により音信不明艦船はその搭載せる食糧、真水の尽きる日をもって戦死公報となるために、出撃して一カ月後の三月十四日の戦死公報となっております。

【解 説】

退艦後の私の経歴は、舞鶴潜水艦基地隊付、

昭和二十年四月一日、横須賀海軍対潜学校高等

科練習生へ（旧機雷学校名称変更）

同年五月一日任海軍二等兵曹に任官す、

同年六月三十日卒業、

同年七月一日、第六艦隊司令部付に転任（呉港

旧潜水学校跡）

同年八月六日、広島原爆を体験し終戦、

八月三十日、本籍地へ復員、戦後舞鶴にて海外

復員業務に従事、

昭和二十三年より地元銀行勤務、県内都市支店

長歴任三十二年勤務で無事停年となる。

以上倚しき運命で生命長らえております靖国神

社、護国神社への祭典欠かさず出席し慰霊に務め

ております。

呂号第四十三号潜水艦の主要装備

常備排水量 一、一〇〇トン、全長八〇・五メー

トル、幅七・〇五メートル

水上 速力 一九・八ノット、

水中 速力 八・〇六ノット

水上 馬力 四・二〇〇、

水中 馬力 一・二〇〇

機関 型式 二十二号十型 軸数二

水上航続力 十六ノット、五〇〇〇海里

水中航続力 五ノット、四五海里

八糎高角砲 一門、二十五糎機銃二連装 一基

魚雷発射管 艦首四門、魚雷五十三糎十本

安全潜航深度 八十メートル

（実際は百二十メートルまで）

定 員 六十名（実際は七十九名）

完 成 昭和十八年十二月十六日三菱神戸造船所

（日本海軍潜水艦史・資料より）